

科学が信頼され尊敬される社会の形成

- サイエンスフロンティア 21 構想推進の基本理念 -

『わが国には、かつて、科学を尊敬する精神的風土があった。その精神は、科学が発展するため、そしてその成果が社会に良き貢献をなすためには必須の条件である。ところが、今日の社会ではこの風土は崩れてしまい科学に対する信頼も薄れつつあるように見える。科学が社会にしっかりと根づくためには、まずその修復が必要であろう。』

サイエンスフロンティア 21 構想の推進を図るにあたって「科学が信頼され尊敬される社会の形成」をその基本理念とし、原子力科学発祥の地である茨城県において先鞭をつけたい。

サイエンスフロンティア 21 構想懇談会がまとめられた報告書には、大強度陽子加速器の建設と核融合計画の推進がうたわれ、重点施策として「研究支援及び産業波及システム」「人材育成」「多国籍コミュニティ形成」の構想の具体的検討を図ることが提言されている。この構想により目指すものは大計画の実現に備えた「後方支援」という要素が中心であるが、同時に、サイエンスフロンティア 21 構想を通じて科学を推進する土壌を育てることに大きな意義があると感じる。

特に、今日わが国の原子力科学の推進にとっては「科学が信頼され尊敬される社会の形成」にむけた地道な努力が望まれる。その観点から、大強度陽子加速器計画を中心に進める一連の努力が、多くの計画を推進する道を拓く基礎となることを意識して構想の具体化を考えたい。

例えば、21 世紀のエネルギー問題を考えるとき高速炉の開発を推進すべきであろう。また、21 世紀のうちに必ず始まるであろう海底開発に対応するため原子力潜水艇の研究開発も必要であろう。これらのテーマがタブーのような状態に陥っている状況は、わが国にとって不幸なことである。この状況から脱却するには「科学が信頼され尊敬される」環境を築かなければならない。一朝一夕に解決する問題でなくとも、本構想の中で実績を示しながら社会の理解を深める努力を重ねるべきであると考えます。(2002.10.20)』

これは、2002 年の秋に茨城県の事業「サイエンスフロンティア 21 構想」の推進委員会委員長を引き受けた時、就任にあたっての挨拶で意気込みを述べたものです。私が、原研一期生として大きな夢を抱いた時の思い、それが僅か4年で大学に戻ることになり、その後ずっと基礎研究の道を歩んで来た半世紀を総括して述べた気持ちでした。

「科学が信頼され尊敬される社会を取りかえしたい」。大学の教壇で講義する時、加速器実験の合間に一休みする時、或いは帰り道に酒を飲んで交歓する時、私は、学生諸君にそう訴えて来ました。私の言うことは、青臭い若者の言葉のように捉えられたかも知れませんが、嬉しいことに、東海村村長の村上さんには共鳴してもらえました。

思えば、私達が原研一期生としてスタートを切った時、社会には科学の成果を活かす新しい時代の始まりとして、大きな期待が溢れていました。私が、生まれて初めてふるさとを離れ東京に向かうというので、家の近くの写真屋に行った時、何に使うのかと問われ、東海村に行くので記念写真を撮るのだと話すと、恰も出征兵士を送るように尊敬を込めて扱ってくれたことが忘れられません。幼い頃から世話になっていた床屋さんでも同じ扱いでした。それがどうでしょう。残念だが今では「原子力」という言葉が敬遠されています。

原研に入ってみると、日本中から集った優秀な仲間には圧倒されました。私よりはるかに良くできる奴らの集まりに焦りを感じましたが、この60人近い仲間と共に原子力研究を推進することの喜びを感じていました。あの頃の若い気持ちに戻りたいと今でも思います。

その後の私の生きざまを変えたのは、やはり原研労組の執行委員になってからでした。これはいわば順番で回ってくる役でしたが、この時躊躇していた私に「経験になるからやってみてご覧」と言われたのは、私が最も尊敬している天野昇さん（後の副理事長）でした。天野さんはかつて東芝のストライキで大活躍されたと言う話を聞いていました。原研は創設に当たり優れた人材を集めるため、公務員の3割増の待遇を与えるという方針で居たのに、それがだんだんあやしくなって来たので組合が頑張る必要がありました。ところが、頑張りが過ぎてストライキをやろうということになり、スト権委譲の投票をしました。その結果が70%弱の賛成で留まったので、天野さんはこのような状況でストライキをやることは、所側にとっても組合側にとってもよくない。結果として原研の立場を弱くする。絶対ストライキを回避しなければならないという御意見でした。私は、執行委員会の中で必死になってストライキを阻止しようと頑張りました。町田委員長を始め、かなりの方々が私の意見を聞いてくれました。それを最後の最後に逆転してあの第1回のストライキに突入させたのは書記長の高橋某という男でした。私は彼を絶対許せません。彼がその後の原研を苦難の道に追い込み、原子力開発の道を歪ませた悪人の一人であると思っています。

この一連の騒動の中で、天野さんは私のことを心配して下さっていました。その頃母校の阪大でも心配して下さる方がありました。山部昌太郎教授です。先生は、そんな馬鹿な所は辞めて阪大に帰って来いと助手に迎えて下さいました。天野さんも賛成して下さいました。それから後は、物理学の基礎研究に従事する充実した幸せな人生でした。

阪大(9年) - 東大(14年) - 高エネルギー研(10年) - 東京理科大(12年)を過ごし、低エネルギーから高エネルギー領域の原子核研究を最大限に楽しむ半生を送りました。

その途中にも、しばしば原研に呼ばれ、物理部評価委員、先端基礎研究の推進委員や、評価専門委員などを通じて原研の動向は拝見していました。

原研創設の頃、一足先に東大原子核研究所が創設されました。共同利用研究体制を築きそれを育てて来た原子核研究と、国策事業として進められて来た原子力開発の半世紀に亘る発展の道を総括して、学術と科学・技術のあるべき姿をよく考えたいと思っています。そして、もっと広く「文化としての学術を護る」ことに力を入れ、科学が社会に貢献する正しい姿を求めて行きたいと考えています (<http://viva-ars.com>をご覧ください)。